



スウェーデン 「住み続ける」 社会のデザイン

水村容子

彰国社

スウェーデン 「住み続ける」 社会のデザイン

水村容子

彰国社

はじめに

大学4年の卒業研究においてスウェーデンの学校建築を取り上げて以来、この国とは長いつきあいになります。「なぜスウェーデンなのだろう?」ということは、多くの方から聞かれますし、自分自身にも問いかけることがあります。実は論理的な回答は存在しません。ただ、「何となく気になったから」「好きだから」「出会いがあったから」という答えになってしまいます。好きな理由は、初めてこの国を訪れた時、「スウェーデンのガラス製品の青がとても美しく、その美しさに惹かれたから」「空や湖、海、森などの自然が美しかったから」という答えになります。

曖昧で情緒的な説明をしました。実際には、「大学の恩師である小川信子先生、故・一番ヶ瀬康子先生、そして、京都大学教授であった故・外山義先生という素晴らしい諸先輩を通じて、この国の研究機関・研究者と関わりを持つことになり、様々な観点からスウェーデンの住宅・建築環境について研究を重ねることができたから」、その一言に尽きます。大学4年の時には障害のある子どもとない子どもが同じ場で学べる統合教育を実現している教育環境について、博士論文のための研究時には先天性の上肢障害のある人々の住環境整備の実態について、その後も、慢性関節リウマチ患者の方の住環境整備やこの国発祥のセーフ・コミュニティという活動について研究を進めてきました。

そして、2012年4月からの1年間、日本で勤務する大学からサバティカル休暇をいただき、18年ぶりにこの国で生活する機会を得ました。この本を執筆しながら現地に滞在し、改めてスウェーデンという国・社会への関心を保ち続けたことへの幸運を実感しています。現在の私は、この本のタイト

ルにもある「住み続ける」というキーコンセプトのもと、様々な観点から研究を行っています。

「心身に障害が生じたり終末期を迎えたとしても、長年住み慣れた自宅に住み続けることができる」

「自然災害に遭遇しても、これまで生活してきた地域に住み続けることができる」

「高齢者ばかりの限界集落になっても住み続けることができる」

「安心して安全に地域に住み続けることができる」

そのための住宅・地域の在り方について考える毎日です。

福祉国家体制が変容しつつあるスウェーデンから学ぶ

スウェーデンという国は1930年代以降、「住むための器」である住宅を社会資本として整備してきた国です。すなわち「住み続ける」ためのハード（住宅）とソフト（制度）の整備が高度に進んでおり、そのことが福祉国家の基盤として捉えられてきた社会です。

残念ながら、世界的な経済至上主義の影響を受けて、スウェーデンのこのような住宅政策・住宅供給の伝統は崩れつつありますが、それでも「住み続けられる」ための努力が制度設計および実際の住宅供給の場面で行われています。少子高齢化・限界集落化・格差化・自然災害による居住の場の喪失など、「住み続ける」上で様々な危機に直面している私たち日本人にとって、スウェーデンの住宅政策・住宅供給のこれまでの経緯や現在の制度、人々の住宅やライフスタイルに対する価値観などから、学ぶべきことが数多くあるに違いありません。

本書はスウェーデンの社会福祉・住宅政策を礼賛するものではありません。

ん。私たち日本人の住まいや生活をもう一度見つめ直すため、その時の相対化の対象としてスウェーデンの住宅や住環境を取り上げています。読者の皆さんが、本書を通して、今一度自分自身の住まいや生活について考え直す、そのきっかけとなることを願ってやみません。

水村容子

はじめに	3
第1章 スウェーデンの住宅政策	8
1.住宅政策の歴史	10
(1) 1930年代 住宅政策の萌芽期	
(2) 1945年～1965年 住宅建設の黄金期	
(3) 1965年～1974年 ミリオンプログラムの時代	
(4) 1975年～1990年 住宅地改良計画の時代	
(5) 1990年以降 政策の方針転換の時代	
2.現在の住宅政策	28
(1) 1980年代までの住宅政策の概況	
(2) 1990年代以降の政策転換の動向	
3.「住み続ける」ための社会制度	38
(1) ノーマライゼーション理念に基づく福祉制度	
(2) 自宅に「住み続ける」ための制度	
第2章 スウェーデンの住宅・コミュニティ事情	44
1.高齢者の住まい	46
(1) サービスハウスの登場	
(2) 特別住宅の拡充とエーデル改革	
(3) 安心住宅の意義	
(4) スtockホルム市の高齢者住宅事情	
2.障害や難病のある人の住まい	60
(1) 建築関連法規におけるアクセスビリティの義務化	
(2) サリドマイド胎芽病による上肢障害のある人々の住環境	
(3) 関節リウマチの人々の住環境	
3.コレクティブハウジングという共生型住まい	82
(1) 第1回国際コラボラティブハウジング会議	
(2) コレクティブハウジング発祥の歴史	
(3) スウェーデンのコレクティブハウス	
4.セーフ・コミュニティというまちづくり	104
(1) セーフ・コミュニティとは	
(2) スウェーデンにおけるSC活動の発祥と展開	
(3) ナッカ市の取り組み(高齢者の安全)	
5.最期まで自宅に「住み続ける」ための仕組み	114
(1) 緩和ケアとは	
(2) エルシュタ病院の試み	
(3) 終末期を維持する住環境整備	

第3章 スウェーデンの住宅政策の転換に伴う住宅地格差の現状	136
1.ストックホルムにおける住宅地格差の問題	138
(1) 格差の原因と現状	
(2) 格差の影響	
(3) 格差を越える試み	
2.「住み続ける」社会をデザインするために 研究者へのインタビュー	156
利潤追求よりも、誰もが幸せになる住宅政策の転換が国を変える	
—住宅政策の転換と「住宅地格差」の現状(ディック・ウルバン・ヴェストブロ)	173
人々の生活に着目し、希望を持たせる社会を実現させることが大切	
—物理的環境改善から個人生活の改善へ向けた改良事業へ(ヨラン・カーシュ)	183
福祉国家としてなすべきことは雇用対策から	
—住宅政策と福祉政策の連携の現状(インゲ・プリット・ベグナー)	198
時代の流れを見極め、中心市街地に賃貸住宅を	
—住宅地格差の出現とスウェーデンモデルの終焉(エリザベス・リリエ)	
第4章 「住み続ける」社会を考える日本とスウェーデンの比較	210
1.住宅政策の歴史の変遷を比較して	212
(1) 戦後の政策の変遷から	
(2) 住宅供給事情・居住階層の相違から	
(3) 「住宅ストックの質」を保つための方策	
2.「住み続ける」ための住まいを考える	220
(1) 良質な住宅ストックが形成されること	
(2) 必要が生じた時に住環境整備がスムーズに行えること	
(3) 経済的に困窮した時でも居住継続が実現できること	
3.「住み続ける」ためのコミュニティを考える	234
集合住宅を通じてのコミュニティ形成	
4.「住み続ける」ためのライフスタイルを提案する	242
(1) ワークバランスを再考する	
(2) 子どもを大切に	
(3) 住宅への愛着と執着	
5.「住み続ける」ために目指すべき方向	254
日本語/スウェーデン語の読み方、意味	257
おわりに	259

コレクティブハウジング という共生型住まい

様々な家族が集まり、共に暮らす居住スタイル

皆さんは、「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」という言葉を聞いたことがありますか？ドイツの社会学者テンニースが提唱した概念であり、その意味は非常に奥深いものですが、簡単に説明すると「ゲマインシャフト」とは、人間の社会に自然発生的・有機的に生じる集団を意味し、日本語では共同体と訳すことができます。それに対して「ゲゼルシャフト」とは、法律や社会規範、経済活動によって成立する近代的な社会を意味します。私がこの概念を初めて耳にしたのは、大学3年時の恩師・小川先生の「地域施設計画」という講義においてでした。社会性のなかった当時、あまりピンとこなかったのですが、現在では、この考え方の重要性が実感されます。自然災害の影響や超高齢社会の進行によって、地域コミュニティの存続が困難となりつつある日本では、近年「自助・共助（互助）・公助」という考え方が見直され、特に「共助（互助）」の重要性が認識されています。私はこの「共助（互助）」という言葉を知ると「ゲマインシャフト」を思い出します。人間の社会には昔から身近な人々と助け合ったり支え合ったりする関係、すなわち共同体が存在し、そうした存在は、人間の生存に不可欠であったはずで、経済性、合理性が重視された近代社会で一時的に希薄化したものの、震災や超高齢化の進行など様々な困難に直面することによって、その重要性が再認識されるようになったのでしょう。そして、私の個人的解釈では、この「ゲマインシャフト」的な居住スタイルを実現しているのが「コレクティブハウス」という住まい方です。

実は、私自身はこのコレクティブハウスを研究対象とした経験はあ

りません。しかしながら、その住まい方に強い関心を持ち、いくつもの住宅を数回に渡って見学し、住民の皆さんにお話をうかがう機会がありました。その結果、この住まい方は、日本に限らず先進諸国が直面している、高齢社会・世帯縮小社会へのひとつの解決策が提示できるのではないかと考えるに至りました。第3節では、この共生型住まい、コレクティブハウスについて解説します。

(1) 第1回国際コラボラティブハウジング会議

2010年、日本ではゴールデンウィーク明けの5月初旬、ストックホルムで第1回国際コラボラティブハウジング会議が開催されました。会場は王立工科大学、開催にあたっての中心人物は1994年の留学時より親交のある、同大学のディック・ウルバン・ヴェスタブロ名誉教授でした。彼が設立に尽力したコレクティブハウスの推進団体コレクティブヒュース ニュ（「コレクティブハウスを今こそ！」という意味）と王立工科大学の都市・地域研究学科の共同開催です。会議の主題は「共に暮らすーコ・ハウジングの理念と世界各国における実践」というものでした（写2-12、2-13）。



写2-12 国際会議で発表するディック氏



写2-13 国際会議の報告書

フェールドクネッペン

高齢期に備えた自由な 居住スタイル

フェールドクネッペンは、私の出身大学の先輩であり建築家でもある小谷部育子先生によって、日本に紹介された住まい方のモデルです。この住宅の存在が日本におけるコレクティブハウスの普及に拍車をかけたと言っても過言ではありません。したがって、私がこの住宅について触れるのは大変恐れ多いのですが、2012年から2013年のスウェーデン滞在期間中、訪れる機会が数回にわたってありましたので、ここで取り上げます。

フェールドクネッペンは、ストックホルム中心部の南側セーデルマルム地区に位置します。地下鉄のメドポリヤープラッツェン駅、通勤電車の南駅、それぞれの停車駅から便の良い場所です。ストックホルム市の住宅建設供給会社ファミリー・ポスターデル社所有の公的な賃貸住宅です。1993年に40歳以上の子どもいな

写真2-20 フェールドクネッペンの様子



庭からの住宅全景



共用の厨房



共用の食堂



共用のリビング



共用の図書コーナー



共用のはた織り機室

い世帯を対象とした「人生の後半生のための住まい」すなわち、シニア型コレクティブハウスとして設立されました。2010年時点のデータでは、52～91歳までの51名、43世帯が暮らしており、男女の割合は男性11名、女性40名、平均年齢は70歳です。約半数が建設当初からの住民で、住宅の建設にあたり、ファミリー・ポスターデル社と設計計画について様々な協議を重ねてきたメンバーになります。「人生の後半生」のための住まいですので、どうしても男女比がアンバランスになってしまうのだそうです。やはり、男性が単身で入居を希望するケースは皆無に近く、ほとんどが、カップルでの入居によるもの。しかしながら、男性陣も入居してみると、コレクティブでの生活を楽しんでいるそうです。住戸の構成は表2-6に示した通りです。

共用空間は、厨房・食堂・リビング

表2-6 フェールドクネッペンの住戸構成

間取り	住戸数
1居室+台所	19住戸
2居室+台所	12住戸
3居室+台所	12住戸

スコークスシュルコゴーデン (森の墓地)

ストックホルムの南部、エンシェード地区の森の中に、1994年に世界遺産に登録されたこの共同墓地は存在します。当時、まだ無名であった建築家グンナール・アスブルンドが、1914年から15年に実施された設計コンペで1等となり、設計にあたった墓地です。私は、人の誕生から死までを表現していると言われる、この場所のランドスケープがとても好きで、何度もこの地を訪れています。

夏の緑鮮やかな時、あるいは秋の木々が色づく季節、墓地の入り口から歩みを進めるにつれて、次第に大きさを増すこの十字架の姿は感動を呼び起こします。しかしながら、何よりも素晴らしいのが冬。純白の丘の上に立つこの十字架の姿は、神の存在をも感じさせます。冬の静謐な、そして肌に刺さるように厳しい空気が、その感覚をより一層深めるのです。



リーディングーの朝日

今回のスウェーデン滞在時は、ストックホルムのお隣リーディングー市にアパートを借りて生活を送りました。リーディングー市は1つの島で成り立っているコミュニティです。自宅からは朝夕、バルト海を経てフィンランドのヘルシンキやエストニアのタリン行きのフェリーの往来が臨めました。また、アパートのすぐ下にはコットラ池という小さな池があり、夏は水泳、冬はスケートやクロスカントリースキーに興じるスウェーデンの人々の生活の一部を垣間見ることができました。この住まいの何よりも素晴らしい点は、朝日を見られたことです。夏至から冬至に至る日の出の位置の移り変わり、夜明け前の空の色、厳冬期の日の出後のダイヤモンドダストの輝きなど、日本の家では見ることのない、自然の雄大さ、美しさを味わうことができませんでした。人間は自然の一部である、そういう認識をもたらしてくれる最高の住まいでした。



「住み続ける」社会を デザインするために

研究者へのインタビュー

第2節では、「住宅地格差」の実態をさらに詳細に把握するために、現在のスウェーデンを代表する住宅研究者に伺ったお話を紹介します。

利潤追求よりも、誰もが幸せになる 住宅政策の転換が国を変える

住宅政策の転換と「住宅地格差」の現状

ディック・ウルバン・ヴェストプロ



プロフィール

スウェーデン王立工科大学建築学部名誉教授。専門は住宅政策、住宅計画。アフリカの居住問題やコレクティブハウジング研究の第一人者。大変なフェミニストであり、ご自身もコレクティブハウスに暮らし、夕食当番などを担当しています。前回の留学（1994～96年）時にも大変お世話になった先生であり、今回のサバティカル滞在中は、研究室をシェアさせていただきました。現在は引退されていますが、かつては左翼党の党員としてストックホルム市議を務めた政治家でもあります。

1 住宅地格差の定義と現状

Q 現在ストックホルムで発生している「住宅地格差」とはどのような現象なのでしょう？ そもそも「住宅地格差」とは、どのように定義づけられるのでしょうか？

「住宅地格差」とは、「都市空間におい

て、異なった社会的・経済的階層、あるいは異なった民族の居住地が空間的に分散して存在している状態」と定義づけられます。私たちの社会に階層間の相違が存在する時、その状態を「格差」と呼びますが、私自身は、それは所得階層の「違い」ではあるが「格差」で

はないと考えています。特に、「住宅地格差」の問題を取り上げる時、「所得階層間の相違」と「民族間の相違」「住宅地格差」といった現象は、区別し整理して捉えなければなりません。

世論や政治では、この区別が常に明確に位置づけられずに議論が進んでいます。私たちの社会に存在する階層間の格差をなくすことは、政治的な命題であり、その達成には、相当の時間がかかると思います。しかしながら、都市に存在する「住宅地格差」は、例えば、そこに暮らす人々の所得階層を混在させるなどの対応によって、取り扱うことが可能です。異なった民族や異なった社会階層の人々を、都市空間において混在させることは、不可能ではありません。

Q そのような前提を理解した上で、「住宅地格差」の問題点とは何なのでしょう？

同じ民族の集団は利点が多い

「住宅地格差」には、良い面と悪い面があると思います。たとえば同じ国からの移民が集まって暮らす場合、母国や言語が共通であるため、その地区の学校では、彼らの言語で教育を受

けることが可能になります。また、地域内での文化的な催しも母国と同じように行えるし、その地域には人々が好む食材を店頭に並べる商店もできるでしょう。彼らは「故郷にいる」感覚を味わえるに違いありません。同じ母国・言語を持つ人々が集住することには、様々な利点が存在するのです。

スウェーデンへの移民は、すでにこの国に定住している同国人を頼ってくるケースが多いので、ある民族が集まって暮らす地域が形成されます。フィンランドからの移民は、歴史が古く多数存在するのですが、すでに私たちの社会に統合されて生活しています。その他では、トルコ・ソマリア・イラク・シリアなどの国から、多くの移民が流入しています。

所得階層の違いが生むもの

一方、所得階層間の格差に関する問題は、少し異なります。一般に低所得階層の人々は、住居費の負担を理由に、他の所得階層が暮らす住宅地への転居を望まないものです。こうした彼らの意向は、本人の意思にかかわらず、居住地に対する選択の自由を奪うこととなります。スウェーデン社会では、歴史的に所得階層格差を可能

「住み続ける」ための ライフスタイルを提案する

「住み続ける」ためには、住宅の物理的環境やそれに関する法律・制度の整備が必要になりますが、それに加え、生活する人々の意識・ライフスタイルなどが重要な要因となります。ここでは、スウェーデンでの生活経験から、「住み続ける」ためのライフスタイル・価値観について提案をしたいと思います。

(1) ワークバランスを再考する

今回のスウェーデン滞在中、平日の私の生活は、7時半出勤、16時半～17時帰宅というパターンでした。もちろん、土曜・日曜日は完全休業です。17時前後のストックホルムの地下鉄は帰宅ラッシュを迎え、買い物袋を手にした人々に賑わいます。地下鉄のラッシュは16時頃から始まり、18時半頃には落ち着きを見せます。私は、ここ数年、あまりの忙しさに話をする時間が取れなかった息子と、なるべくゆっくり夕食を共にしたいと考え、早い時間の帰宅を心がけていましたが、留学先の学科の若手研究者も、ほぼ同じくらいのタイミングで帰宅の途についていました。お陰様で、東京の生活では、連日お総菜を買込み、さっと夕食を終わらすのが常でしたが、スウェーデンでは毎日材料を購入し手作りの夕食を息子と共にすることができました(ティーンエイジャーとの会話はあまり弾みませんでした……。)

ゆとりを持って効率的に生活する

前節の最後でも触れた通り、スウェーデンは日本と比較して平均年間実労働時間が100時間程度短いのですが、日本よりも労働生産性

が高いという統計結果が出ています。この数字は、休暇をとることが仕事の効率性を向上させることを意味しています。国際競争力を計る指標は色々と存在しますが、スイス・ローザンヌの国際経営開発研究所(IMD)が毎年公表している国際競争力(定義:グローバル企業への活動支援においてビジネス環境がどれくらい整備されているか)ランキングにおいて、2012年スウェーデンは5位、日本は27位でした。また世界経済フォーラムでは、国際競争力を「国の生産力レベルを決定する制度や政策、諸要因の組み合わせ」と定義づけていますが、この指標下においても、スウェーデンは世界4位に対して、日本は10位のランキングです。

故・外山義先生のご見解ですが、スウェーデンの人々のライフスタイルを説明した、私の心にとっても印象深く残っている言葉があります。

「日本には、生活の枠組みを示す言葉として、衣・食・住という表現があるけれど、スウェーデンの人たちは生活の枠組みを住宅・仕事・余暇というふうに捉えているようです。家族とともに生活を送る住宅、そして、経済的な自立・自己実現を果たす仕事、さらには、慌ただしい日常から自分を取り戻し再生するために必要な余暇。この3つの枠組みがそろって初めて人間の生活が成立する、そのような捉え方がなされています。日本では、余暇はレジャーを意味していて、仕事の合間にやっと取れた休みに混み合っている観光地を訪れ疲れ果てていますが、スウェーデン人の余暇は楽しむことよりも、自分を取り戻す時間として機能しているのです」

確かに、平日の仕事の切り上げ方や長い夏の休暇を見ても、仕事に引きずられるよりは、余暇を重視している姿勢がうかがえます。そして、その時間の過ごし方ですが、私の知人たちの例では平日の就業後には、スポーツや音楽サークルでの活動、政治活動あるいは集合住宅の管理組合活動などに参加し、そして、長い夏の休みには、時間